

# 歴史に学ぶ

大阪経済大学特別招聘教授  
経済評論家

岡田 晃

## 第三十回 老中に抵抗した名奉行・遠山の金さんは理想の上司

### 鬼平と共に通する青年時代

遠山の金さんと言えば、一昔前のテレビ時代劇のヒーローの一人。お白洲で悪人どもを前に片肌脱いで「この桜吹雪に見覚えがねえとは言わせねえぜ！」とタンカを切るのがお決まりだった。これはもちろんテレビでのことだが、金さんが北町奉行として活躍し、江戸庶民から拍手喝采を浴びていたことは史実だ。

金さんこと遠山金四郎景元（金四郎は通称、景

元が諱）は一七九三年、旗本・遠山景晋の息子として生まれた。しかし複雑な家庭の事情があり、青年時代の景元は家を出て江戸市中で放蕩三昧の生活を送ったという。例の桜吹雪の刺青は、その頃に入れたものと言われているが、刺青は单なるうわさとする説もあり、はつきりしたことはわかっていない。

刺青はともかくとして、やがて遠山家に戻つて家督を継ぎ、役人生活をスタートさせる。前回の

鬼平こと長谷川平蔵と似た境遇をたどっている点が興味深い。そして平蔵と同じように、この経験が後に名奉行となる下地を作ることになる。

景元は順調に昇進を重ね、一八四〇年に北町奉行となつた。四十七歳の時である。北町奉行は、南町奉行とともに月番交替で江戸を管轄する最高責任者で、現在の東京都知事と警視総監と東京地方裁判所所長を兼ねたような立場。旗本が就ける役職としては実質的に最高位だ。

### 水野忠邦の「天保の改革」 ～奢侈禁止、強権政治に抵抗～

その翌年（一八四一年）、大御所・徳川家斉が死去すると、水野忠邦が「天保の改革」をスタートさせた。生前の家斉は贅沢な暮らしで財政を浪費し風紀も乱れたと言われ、こうした風潮は一般にも広がり、物価も高騰していた。これを正すた

は飼い鳥に至るまで、庶民の生活のすみずみにわたり事細かに奢侈を禁ずるもので、個別にお触書を次々と出していった。

当時、歌舞伎役者の衣装や髪型などが流行し役者の錦絵がよく売れていた。忠邦はこれを贊沢と風俗の乱れの元凶と断じ、江戸中心部にあった歌舞伎の三座（中村座、市村座、森田座）を、その頃はまだ郊外だった浅草に移転させた。さらに人気ナンバーワンだった七代目市川團十郎を江戸追放処分にした。

寄席も取り締まりの対象とし、二百軒以上あつた寄席すべてを閉鎖させる方針を打ち出した。さらに好色本や人情本の禁止、出版物の事前検閲などを行い、人情本作家を投獄している。

江戸時代にはそれまでも何度か儉約令や奢侈禁止が発令されたが、忠邦のそれは最も厳しく、かつ強権的だった。江戸町奉行はその命令を実行する立場にあるわけだ。しかし金さんこと遠山景元はことごとく抵抗したのである。

景元は「僕約は必要だが、寄席は庶民のささやかな娯楽であり健全なものだ。それを奪うべきではない」と主張した。結局、寄席は何とか全廃を免れ、わずか二十軒余りではあるが存続が許されることになった。

歌舞伎の三座廃止についても「辺鄙な所に移転させても人心を動搖させるだけで、改革に効果はない」と訴えた。しかしこちらは景元の主張は通らず、忠邦の方針どおり実行された。

忠邦はまた、床見世を全面撤去したいと考えた。床見世とは、道路沿いや河川敷、空き地などに出店する露店や屋台のことである。無届けのものも多かつた。忠邦はこれも贅沢の表れと判断したのである。景元はこれにも反対し、結局、忠邦の在

任中は結論が出なかつた。事実上、景元の主張が通つたのだ。

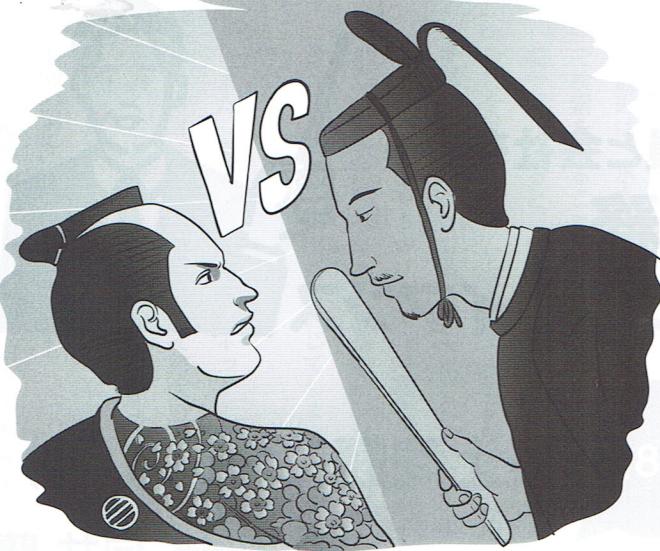
経済政策でも、景元は抵抗している。忠邦は、農村の荒廃によつて農村から江戸に流入する者が増えすぎて、治安の悪化や暴動（打ちこわしなど）のおそれがあるとして、江戸に来ている農村出身者を強制的に農村に戻させる「人返し令」の具体化を景元に命じた。

これに対し景元は、「彼らは農業では生活できなくなつたから江戸に来たのであり、江戸の生活に慣れた者を帰農させるのは非現実的」として反対した。その結果、人返し令は「新たに農村を出て、江戸の人別（宗門人別改帳）現在の戸籍に当たる）に入ることを禁止する。ただし江戸で商売を始めたり妻子を持っている者は帰郷には及ばない」という内容で発令された。景元の側から言えば、骨抜きに成功したのである。

景元はまた、忠邦が「物価高騰の元凶」として株仲間の解散を命じた時、「かえつて流通を混乱させる」と考え、そのお触書を市中に流すのをサボタージュしている。実際、株仲間の解散後も物価上昇は続き、景元が予想したとおりとなつた。

## 左遷されるも、南町奉行に復活

このようにみてくると、景元は忠邦の重要な政策にほぼ全面的に抵抗していたことがわかる。その勇気たるや、大変なものである。それが江戸庶民の拍手喝采を受けたのだ。「遠山の金さん」の姿そのものである。



しかも重要なのは、忠邦の一連の政策で、江戸の町は一気に不況となつたという事実だ。世情になぞらえれば、現場をよく知り市場ニーズを的確につかむことが何よりも重要だということだ。

だが景元は忠邦の怒りを買ひ、北町奉行就任からわずか三年で大目付に異動となつた。大目付は形の上では町奉行より格上だが、実質的には閑職だつた。いわば、取締役の方針に抵抗した部長が、榮転の形を取りながら体よく左遷されたようなものだ。

それにしても、軽い左遷でよく済んだものだとと思う。実際、罷免や処分などの例が他にある。それは、第十二代将軍・家慶が景元を能吏として高く評価していたことが影響したらしい。普段の仕事ぶりがいかに大事かを示している。

そのおかげもあつて二年後の一八四五年、忠邦が完全失脚したのと入れ替わるように、南町奉行として復活を遂げたのだ。着任した景元は株仲間の復興を上申し、老中首座となつていた阿部正弘がこれを採用した。寄席も復活させ、棚上げ状態だった床見世も存続が決定した。

このような「金さん」は、まさに理想の上司。現代の企業人としての生き方や仕事への姿勢、そして勇気を持つことの大しさを教えてくれている。

**岡田 晃**（おかだ あきら）

一九七一年、慶應義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長。二〇〇六年から大阪経済大学客員教授。二〇一二年、同特別招聘教授。